

盂蘭盆

み佛を迎へるとは何といふ美しいこの世の習慣ならはしでありませう 遠き祖先みおやや兄から姉からや親しい友のたれかれと仏間に度しく見えるのは何といふ麗まどろはしい団欒だんらんでありませう あの夜の和楽 この世の愚痴を 彼等は賑やかに取り交はすでありませう 賽の河原のわらべらも 今宵茄子のお馬で愉しく一夜を遊ぶでありませう 岐阜ほん提灯のやはらかな青い燈は それをこの世ならぬものに 仄かに照すでありませう 香煙は縷々として夜つぴても饗宴うたげの膳へめくを囲繞めぐるでありませう まことに今宵ほど あの世がこの世であり この世があのでないと誰が言へるでありませう 入滅といひ 昇天といひ 何といふ儼かな人の世の嬉しい有情うじやうでありませう やがて 佛間に夜は更けるでありませう されどみ佛とわれ等の歡語かんごは尽きることなくめんめんと続くでありませう み佛たちに別れるのは何にもまして悲しいでありませう 暫しの別れではありませうがそれがどのやうに深い悲愁かなしみであるかは 佛間に集ふ者のみが知るところでありませう おつつけこちらから訪ねることに致ませう やがて彼等は涙を呑んで袂を別つであります 嗚呼この有情の激しさ 抒情の精華 永遠の人間性は何時も斯くの如くでありませう み佛を迎へるとは何と言ふ美しいこの世の習慣でありませう

(昭和十三年「山桜」十月号)